

# 南方（仏印）

青春を捧げた

軍隊生活の思い出（その四）

福島県 大竹 清 照

歩兵第八十五連隊第三大隊は永涼から南寧に向かつて行動中の昭和二十（一九四五）年一月十九日、永涼県大景郷龍口村付近において敵と遭遇、関口伍長が負傷した。

南寧に向かって出発した第十中隊は、主力の尖兵として南寧を目指して進んでいた。赤土の軍用公路を西へ西へとただただ歩いて行く。夜が明け道路脇で小休止した。この辺りから、裸山の饅頭

形の山容は少なくなつて山は高く、所々險峻な岩肌をのぞかせる山波が多くなつてきた。この時期は日本では大寒に入つて連日身を切るような寒さが続いているだろうが、ここ南支の果ては、さすがに寒さを知らない。行軍していく我々の身体からは汗が溢れ出る。どうした訳か、ここ半月ほどは敵機の攻撃はバツタリ止んで、南寧まではさしたる敵の妨害も無く進軍することできた。南寧にはすでに第八十四連隊が入っていたので、我が第三大隊は無事南寧に到着、連隊主流と合流した。

第十中隊はここで「各隊の使役に徴用していた苦力を開放し、連隊行李班まで連れて来るように」との指示を受けたが中隊では戦闘中徴用した苦力はいなかった。何でもここから苦力を開放し

て広東の方へ帰してやるのだという。

明号参戦に参加した第二十二師団は、新設第三十八軍の麾下に入り、三日三晩の強行軍で昭和二十年二月十七日、支那と仏印の国境の鎮南関を通過、仏領インドシナに入った。国境の門は高さ約十メートル位あったと思う。夕方となり驚いたのは「ドンダン」の街へと行進して行くと今までは全く違った街造りとなり、建物はカラフルで街路には灯が青白く輝き、人々の服装もちょっと違った洋風であった。我々は長い間の戦闘の連続で後方からの補給もなく、中国の衣服をまとい、彼らからは乞食部隊が通ると笑われたものだった。道路はここからサイゴンまでアスファルト道路だと言う。今まで赤土の道路だけを駆け廻って来た我々には、田舎者が都会に行ったような感じである。

やがて「ランソン」の街に入った頃には明け方となった。休憩する宿舎もない。ふと右手の方を見ると大きな鍾乳洞があった。中に入って見たら

かなり広い。中隊はひとまずここを宿营地とし久しぶりの飯盒炊きをした。ここは駅の前で、川に架かっている橋は真中が鉄道でその両側が車道になっている。共存共栄の着想には感心した。我が国では釜戸が違えば皆別だとして鉄道は鉄道、道路は道路と別々であるが、ここでは柱にも一緒に電話線が張られている。

我々歩兵第八十五連隊の仏印入りは、一時覆面部隊として行動も秘匿にされ「光第七五三五部隊」と名乗っていた。これは仏印側の申し出で「国境を越えて仏印入りするのは一個師団だけを許可する」ということであつたので連隊の仏印入りはフランス軍に秘密にするためだつたと思う。

ランソンの洞窟で二、三日宿営した我々は行動を開始、鉄橋の破壊されているところは徒歩で渡りその駅からは列車で「キノン」と言う港町まで行った。途中首都のハノイを通り、キノンには、大隊主力より二日程遅れて着いた。海岸沿いの空倉庫に小隊毎に分かれて宿営し次の命令を

待った。その頃日本の松岡全権大使と軍首脳部はフランス側と第三次の進駐を認めるか否かで折衝を重ねていたのだという。

昭和二十年三月九日、午後八時を期して「イエス」か「ノー」か、仏印全土の我が軍は夜襲に備え「イエス」の場合は青の信号弾、「ノー」の場合は赤の「信号弾」が打ち上げる事になっていた。我々は倉庫横の広場に集合して、小隊毎の夜襲の作戦を指示され、今か今かと時計の針を見つめて待っている。皆できれば青信号であってほしいと胸の中で祈っていたのに違わないだろう。中国大陸の作戦では幾多の戦友が戦死している。昨日は誰、今日は誰、明日は我が身かと、今日まで持ってきた命である。ましてや夜襲となると敵弾は誰に当たるか分からない。そんなことを思う中、時計はすでに午後八時を十分も過ぎていく。どうしたのかと、不吉な予感が頭の中をよぎった。その時パーンと赤の信号弾が真っ暗な夜空に炸裂した。その時「よしやるぞ」と覚悟を決め、

予め示されていた行動を開始した。

その時運悪く自分は、二日前からマラリア熱で寝ていたのだった。そして三浦上等兵が横県付近の戦闘で負傷して以来、軽機は私が担いで来たのでこの夜襲には銃剣がない。それで元初年兵教育当時の助手であった増田兵長が私のために竹槍を作ってくれていた。油を付けては焼き、油を付けては焼いて磨くと昔の戦国時代に用いた竹槍ができた。これならば銃剣と同じに刺殺できると、まだマラリア熱で若干頭がふらつくようだが、そんな事を言っていられない。

行く先は海岸沿いにある教育隊であった。第一小隊長国分少尉、分隊長増田兵長、次に自分、後は誰だか忘れた。教育隊兵舎の囲いは高さ二メートル余りのコンクリート塀で、正面は海に面し、その前はアスファルト舗装道路であった。この晩は一寸先も見えない真っ暗な夜であった。塀に張り付くように沿って一列縦隊で腹這いになって正面入口に進んで行った。その時後の方から軍靴の

音がして、四、五人の友軍の兵隊が「人力車」を引いて入口正面まで来たが敵前なので声も掛けられない。すぐ引き返して行った。

彼らも我々が伏せているのに真つ暗なので気が付かない、多分彼らはもうこの教育隊の夜襲も終わったであろうと思つて来たのだろう。敵はこれを察知して変だと思つたのだろう、我々の伏せている地点まで来て、また引き返して行った。

自分は小隊長に突っ込むのは今だと言つて、一斉に立ち上がり突っ込んだ。ところが敵は正面に機関銃を据え一斉に銃撃の雨を降らせてきた。その一瞬、自分は砂利盛につまづき「バッタリ」と横転してしまった。頭の上をバリバリと猛烈な機関銃の乱射が始まった。先頭の国分小隊長が臀部に銃弾を受けて闇の中に跳ね飛ばされる。続いて行った増田伍長は胸部に数十発の弾丸を受けて壮烈な戦死を遂げた。また第二分隊の鈴木美一伍長も後方に居たのだが腹部を射たれて即死である。戦場では何が幸いするのか判らない。私が砂

利盛に足を取られて横転している一寸の間に銃の銃弾は二人を戦死させ、一人に重傷を与えたのである。

私は直ちに立ち上がつて横飛びに門の中へ飛び込んだ。鼻をつままれても判らない真つ暗闇の中、誰が誰やら敵か味方さえ全く見当もつかない。敵のざわめく声がしている。この時、門内に飛び込むと中に鈴木光義上等兵もいたが、夢中で飛び込んで行ったためどこにどういう形で味方の兵隊達がいるのか全く判らなかつた。私は兵舎の玄関口の方に目を凝らして見ると、五、六人の敵兵が出て来るのが見えた。玄関の中は彼らの衛兵所のようなだ。私は玄関へ上がる三、四段の階段の下まで進んでいたものでちょうど自分の正面である。このままでは自分がやられてしまう。

咄嗟に機先を制して真中の敵の胸に向かつて思いきり竹槍を突き刺した。ここは暖地であるので敵の衣服も薄着で鮮血がほとばしる程突き刺さつて手応えは充分であつた。

急に真っ暗闇の中から日本兵が飛び出して攻撃をして来たので、敵は驚いて同僚を見捨てて中に逃げ込んだ。中には何人か居るようだ。自分は手榴弾の止金を引き抜き中の衛兵所に投げ入れると階段の下に伏せた。「ババーン！」という炸裂音と「ギャー」という悲鳴がして、室内は電灯が壊れ真っ暗になってしまった。しばらくの間、あたりは「シーン」と静かになる。分隊の兵隊も私の側に来たが暗くて誰彼の区別が付かない。その時斜め左手の方から我々のいるのを察知してか敵は機関銃を乱射してきた。敵も真っ暗闇の中なので目くらめっぽうに撃っている。

伏せている我々には機関銃の発射する閃光で大体の距離が判った。「十メートル位だろう」私は誰かの手榴弾を取り、止金を引き抜き閃光を目掛けて投げつけた。「ババーン！」物凄い炸裂音と共に機関銃の音はバツタリと止んでしまった。

また元の静けさになる。誰かが外から玄関付近

に手榴弾を投げて炸裂した。「オーイ！中に大竹が居るぞ！」と怒鳴った。しばらくして高草木軍曹以下数人の兵隊達が入って来た。「オーイ！大丈夫か！」「兵舎内を搜索しろ！」ということ自分で自分も一緒になって各部屋を見て廻った。ある者は机の下に、ある者は便壺の中で震えている。いずれも戦意を無くしていて我々の言うなりに出て来て降伏した。

朝になり我々は昨夜の戦闘の模様など話し合いながら、無事なことを祝福し合った。ところが私はふと鈴木上等兵の鉄帽を見てびっくりしてしまった。彼の鉄帽には前と後に二センチの大きな穴があいていた。鈴木上等兵も私に言われて初めて気が付いたらしく、自分の鉄帽を見て驚いていた。それにしても頭に何の怪我也なく本当に良かったと喜んだ。鈴木上等兵は万一生きて故郷に帰るようになった時は、これを持ち帰って家宝にしたいなあと言って皆を笑わせていた。

我軍の夜襲攻撃でフランス軍も白旗をかかげ、第三大隊長橋爪少佐に対し無条件降伏を誓った。大隊は兵をまとめ「ヴィン」に進攻して行ったが、第十中隊はキノンの仏軍連隊本部の警備として現地に残り、戦後処理と市街地の警備に当たった。中隊本部は、昨夜占領した教育隊に置き、我々一個小隊は、仏軍連隊本部の将校兵共約五百人の捕虜の監視を命ぜられた。我軍の攻撃も文字通り猛攻であり、また彼らも頑強に抵抗し、本部には戦烈の物凄さを残していた。他の部隊が敵の死体をトラックに積んで運んでいた。所々に我軍の砲で破壊された塹に穴が開いていた。

私たちは衛兵所を設けて出入者の検問をする。自分は下士勤務であったので衛兵の勤務に就くこととはないが捕虜の糧秣受領の役を引き受けて、毎日仏軍の兵隊に馬車を引かせて中隊本部へ行き、受領して来て、彼らの炊事に届ける役をしていた。捕虜の彼らには日常外出は許されない。それが糧秣受領役だと街へ出られるので志願する者が

多くなつた。自分は華僑の自転車屋さんがとても親日家で、家内中が心よく迎えてくれ、いつもここで一休みする。

ところがその道路向かいにバーがあり、自分たちが休憩している間に彼らはここで酒を飲むのが目的で、私と一緒に糧秣受領が何よりの楽しみであつたらしい。この事が次々に伝わり、希望者が多くなつた。ところが交替制にして連れて行つたある日、一人の兵隊が酒を飲み過ぎてどうすることもできなくなり、彼を糧秣と一緒に馬車に乗せて帰る始末となつた。それからというもの、真面目な兵隊一人に決めた。

この兵隊は階級は一等兵であつたが真面目で気持ちの優しい人であつた。我々がここから他の部隊と交替して別れる時、彼は営庭のベンチに自分を待たして、物売りに来る安南の商人からいろんな食べ物を買って来て、送別会だと言つて「いろいろお世話になりました、今後共武運長久を」と言つて涙を流して別れたものでした。

一時は敵味方であったにせよ、世の中の同じ人間同士、心と心の気の合った友として今だに忘れられない友情であった。

昭和二十年三月二十九日、第三大隊は命令を受けてハノイから四〇〇キロ離れたラオスの山岳地帯へ進攻した。大隊本部をバン、バンに設置し、シェンカンの北方約二十キロの地点タイムに配備を命ぜられ、我々十中隊は密林を踏み分け、ポリカンの湿地帯を通ってタノムの部落に向かって進んで行った。山の中の小道を歩いて行くと向こうより、男だか女だか判らない腰の周りに木の葉の付いた蔦のような物を巻いて、蕃刀を腰に差し、手に持った棒の先には、衣に包んだ白い粉を入れた物を着けて歩いて来る現地人に会った。

小休止となって皆どっかりと腰を下したら股のところを真っ赤に染まっている。「オイオイ！何だその股の赤いのは」と言われた兵隊は、びっくりして見たら、成る程べっとり股に血がにじ

んでいる。早速股下を脱いで見たら、急所の袋に中指程太く血を吸った陸蛭が吸いついている。

自分はその時までには異状はなかったが、次の休憩の時には同じ運命となった。それはこの地特有の陸蛭と言って一センチ位の小さなものが木の小枝の葉に棲息し、下を通る人間の頭や背中に落ちどこを通って下るのか不思議な位、人間の体には何の感触も与えず急所の袋に吸い着く。だから何も判ったものではない、ほとんどの者がこれにやられた。先程すれ違った現地人が棒の先の布に白い粉のような物を着けて歩いて行ったがそれがヒルの忌避剤だったと後で判った。

ジメジメした湿地が至るところにあり、行軍する兵隊たちの足首まで濡らしていた。ようやく中隊はタトムと言う部落に到着した。早速酋長に会って現地での宿舎の借入れの交渉に入った。部落のほぼ中央にある寺を借り、中隊はここに営舎を定め、付近の住家も二軒ほど借りて中隊本部に

当てたのである。

この当時、ラオスの各部落には区長級が平酋長、町長役が中酋長、県知事級が大酋長と言うように我が国の武家政治時代とまったく同じで、大酋長の前では一般住民は地に土下座して頭を地に着け上げる事ができない。我が国の殿様と一般土民のような形態であった。

山中の住民は土地を焼き払い、耕して種子を播き、無肥料で十数年作り、また別な所へ移動するという焼畑農業をしている。住宅も丸太を立ててアンペラで囲い、屋根はニッパ椰子の葉、床下は二メートル位の高さにアンペラを敷き真中に小さな囲炉裏があり、石で五徳のようなものを置いている。これを竈代わりに瓶でもち米（キンカオ）を炊き、手で南蛮の辛いのを付けて食べるのが常食のようだった。彼らは常に半裸でどこへ行くにも素足である。足裏はまるで地下足袋の底のように厚くて山の中でも平気であった。そして文化の火のとどかない過疎の村ではあるが性格は非常に

温和で、人なつこい正直者で、すぐ兵隊たちにも馴れて、手真似や身振りでお互いの意志を通じ合うことができた。

我々中隊はここを根拠地として軍用道路の構築作業に従事する事になった。昭和二十年四月、この地方では雨期を迎える時期だった。雨期になるとこの辺一帯は池のようになり、水害を防ぐためと、この辺では虎や豹が出るため軒下を高くして梯子を直角に立てて置き猛獣や外敵から家族を護ると言う。そしてどこの家の床下に丸木舟が吊るされていた。山畑の稲穂が実り収穫ができる頃、男達は蕃刀を持って山畑へ行き、稲穂の部分だけ切り取って籠につめて家へ帰る。粃のまま貯蔵して食べる必要分だけを女が臼でついて白米にする。山畑に残した稲株からは再び収穫できると言う。

その後、稲株に火を付けて焼けば肥料になると、真に合理的な生産方法で生活していた。また

山は誰の者という所有者が無い。自由に焼畑を造成する事が可能だという。また家畜の姿が見えないので「飼っていないのか!」と聞くと「山に放し飼いをしている」という答えが返って来た。首をかしげる私達に話を通じないと思ったのか、家が上がって行ったかと思うと軒先に吊るしてあった版木を叩くと驚いた事にあたりの山の中から突然降って湧いたように真っ黒な豚や鶏の群れが、家を目掛けて一目散に駆け下りて来た。

私達は鶏には羽があるのは知っていたがあれ程空高く天空を飛んで来るのには初めてで驚きを新たにしたものだ。

中支にいた時も、部落中の豚数十頭を一人の小輩が笛を吹いて豚が列を作って野原へ連れて行く。一日中草等を食べ夕方になると小輩の笛の声で集まり各家へと帰って行くと言う光景を見て来たが、ここでは版木を合図に飼い馴らしている様子にはまた驚き感じたものだった。それぞれの家の軒下で豚や鶏は餌を食べ終えるとまた再び山の中

に向かって姿を消して行った。全くの野放しである。

或る日の夜中であつた。我々は丸太を組んで地上一メートル位の高さに作った便所で大便をしていると真っ黒い豚が奇麗に食してくれるので跡の始末には大変役立ったものだった。また彼らは鶏や豚の肉を必要とする時は、餌で引き寄せて置き弓で射って捕獲するのである。決して動物仲間にいる所で血を流さないようにして獲るので、外の仲間は全く知らずに餌を食べに集まってくるのだという。彼らの弓矢の技術は全く素晴らしいもので、数十メートルの距離ならばまさに百発百中、狙ったを外した事がないと言う。

五月中旬、中隊の一部は師団通信隊による電話線の架設工事の使役に借り出された。屈強な地元住民と共に密林に入つての作業である。密林の大木は直径二メートル以上の大木もあり、「ダイナマイト」で倒木しての軍行路造りと、電話線架

設等は並大抵の苦勞ではなかった。

ある時、軍行路構築に使役として使っていた連中がストを起こして作業に出役しなくなった。

我々中隊の兵隊だけではどうすることもできなくなり、仕方なく大酋長の家の前庭に約百数十人を集め「大酋長が我々に協力するよう訓示をしてもし聞き入れなかったら武力を行使する」と言つて、私が彼らの目の前に軽機関銃を据えて密林の方に向かつて乱射して見せた。彼らには弓矢以外の武器を見た事もないので驚いてしまったらしく、次の日からは再び重労働に協力してくれたこともあった。

この辺一帯には真黒い手長猿がいて、夕方と朝には全山の樹上から「ヒーイ！ ヒーイ！」と鳴いて賑やかになるので毎朝きままって猿の声で起床するようになった。

タトムの部落で何カ月か生活している内に色々な生活様式を知ることができた。毎日の飲料水は谷川から水を汲んで来る。容器も現在のようにビ

ニールのバケツがある訳でなく彼らはザルに水を入れて担いで来る。ザルに水とは考えもできなかったが、そこはそこに住む生活の知恵というか、竹箆の内側に、蠟の汁を塗って水がもれないようにしてある。蠟の木をどうするのかと思ひ、住民に案内してもらつて山に行くのと直径一メートル以上の立木に穴を掘つて蠟の汁を溜めそれを塗ると固まつて水が漏れなくなると聞かされ、初めは「何と文化の低い連中だろう！」と半分軽蔑していたが、その土地に依つて考えられた生活の知恵には頭の下がる思ひだった。

中隊主力がこのような生活をしている時、自分と田中中隊長それに当番兵の遠藤藤次右エ門の三人で、後続師団の糧秣確保のためジャンルの道を通りメコン河の支流の部隊に行った。ここからは行く先も知らされず部落民から一艘の舟を借り船頭を二人頼んで川を下つた。岸边には猿が水浴びをしていたり、大木には一メートルもあるイモリ

が付いてもいた。幸い猛獣には出会わず、下流まで来ると左岸に竹林がある。舟を着けて船頭たちは長さ十メートルの竹を二十本位切つて舟の両側に結び付けた。

地形を知っている彼らの話では、ここから川は急流となるので舟が転覆しないようにするのだと言う。成程これも彼らの安全を考えての知恵かと感心した。舟は川下へ下つて行くと川中が若干狭くなり流れは今までと違って急流となり波しぶきが舟の中へ入つて来る。先程、船頭達が竹を両側に抱えて来なければ舟は転覆していたかも知れなかつたらう。と後になって、彼らに対し感謝したのでした。

いよいよ本流のメコン河へと下り、中隊長と遠藤兵長はどこへ糧秣収集に行ったのか、自分一人はメコン河岸の他部隊（東京出身）の分哨がある所に上陸して、しばらくここで我が中隊主力の来るのを待つことになった。

この分哨長は曹長であったが、他の兵隊達も

自分を客分扱いしてくれたのには嬉しかった。ここは平和な、そして部落民とも仲良くしているのどかな所であった。朝市が開かれ畑から取れ立ての熟したパイナップル、ビワ、バナナ、椰子の実、それに大きなパンの実など本当に畑で熟した物を食べられたのは、あの時が初めてで、そして最後であった。現在でも内地では到底味わえないことである。

また、分哨長から「今日は天気もよいから、魚取りをやりましょう」と部落民にも知らせ、小船を借り受け「ダイナマイト」を水中約三、四メートル位の所で爆破するようにして丸木の浮きを付けメコン河の岸辺から二十メートル位離れた位置を舟で下る。そしてダイナマイトに点火して投げ込み舟が下つた所で「ボカーン」と水煙りが盛り上がる。しばらくすると河一面に真っ白な腹を上にした魚が浮いて来た。

水泳には子供の頃から自信があるので大きな竹箆を持って河に飛び込み、たちまち魚が箆いっぱい

いになってしまった。現地人も喜んで魚を拾っていた。分哨にいる兵隊たちはほとんど東京出身の人で、濁流で大きなメコン河などでは泳げないと言ふ。この魚取り法はここに約十日程いた間三度ほど行い思い出の一つでもある。

しばらくして中隊主力も船で下って来てこの部落に宿営することになった。分哨の人たちに別れを告げ中隊に復帰し、この魚取りの方法を中隊に教えたところ早速メコン河の支流の合流点で「ダイナマイト」を水中に投げ入れた。ところが我々が今までに見たこともない長さ二メートル余、胴廻り約九十センチはあろうかという大物が獲れ、川から四人掛りで棒に通して中隊まで運んで来たのにはびっくりさせられたものだった。中隊全員でも食べきれなかった。

## 【解 説】

明号作戦に参加した我が師団は、仏印国境通

過、中国領からフランス領に入ったが、ドンタンの街は建物も道路も違っていた。仏領に入るの是一個師団のみの仏軍の申出があり、第三次進駐は「イエスカノーカ」決定していなかった。が、「ノーの赤信号」であり、部隊は「よし、やるぞ」と覚悟を決め行動を開始した。

当日、自分はマラリア熱のため寝ていたが、私は軽機関銃担当なので銃・剣がない。そのため竹槍を持って突入した。敵は正面に機関銃を据え一斉に乱射してきた。その時、自分は横転した。銃弾は、我が上を飛ぶ、小隊長も銃弾を受け、増田伍長も壮烈な戦死、後方の鈴木伍長も即死。

戦場では何が幸いするか判らぬ、もし私が砂利盛に足を取られ横転したちょっとの間に二人が戦死だった。私は横転して門の中に飛び込んだが、真っ暗な中、敵、味方さえ見当つかぬ、真中の敵の胸に向かって竹槍を突き刺した。敵は同僚を見捨てて中へ逃げ込んだ。自分が手榴弾を投げ込むと、炸裂音と「ギャッ」と言う悲鳴がした。敵は

機関銃を乱射してきたが、戦意を失い降伏、我が軍の夜襲で仏軍は白旗を掲げた。私達は衛兵所を設け出入者を検問する。

三月二十九日、第三大隊は、ハノイから四〇〇キロのラオス山岳地帯へ進攻した。山中の住民は、焼畑農業をしている良民で、身振りで意志を通じ合うことができた。

四月、この地方では雨期の時期で、五月中旬、中隊の一部は、師団通信による電話線の架設工事の使役を命じられた。屈強な地元住民と共に密林に入り作業をする。密林の大木は、直径二メートル以上もあり、ダイナマイトで倒し、軍行路造りと、電話線架設工事は並大抵の労苦ではなかった。

ある時、使役として使っている現地人がストをしたので、大酋長の家の前に百数十人を集め、もし大酋長の命に従わねば武力を行使すると言った。当地の部落民の武器は弓矢程度であるので、酋長の命には従うと、和解をし、架設、道路建設

に引続き協力をしてくれた。

このタトムという部落で、何カ月か生活しているうちに色々な生活様式を知ることができた。竹籠の内側に蠟の汁を塗り、現在のポリバケツの代用にしたり、急流での舟の転覆を防いでいたり、彼らにもいろいろ協力を受け、我々はメコン河の本流を下り他部隊の分哨のある所へ上陸し、我が中隊主力の到着を待ったのである。

しばらくして、中隊主力も船で下って来てこの部落に宿営、我々は本隊と行動を共にするようになった。その後の作戦は仏印より、タイへ、そしてビルマ方面への作戦にも参加し、多くの戦友を失ったのである。